

## 北海道の脱植民地化とアイヌ民族の遺骨の帰還

小田博志（北海道大学）

勤務先の北海道大学文学部の授業で、「北海道が“北海道”と呼ばれるようになったのは何年のことですか？」と質問をして、正確に答えられる学生はほとんどいない。また札幌市の“札幌”の語源を知る学生もまずいない。その札幌市に位置する北海道大学のキャンパスには「クラーク博士」の銅像が建立され、観光スポットになっているが、その同じ土地に、150年くらい前までアイヌのコタン（集落）があり、ここがアイヌの生活の場であったことは現在どこにも記されていない。この忘却、記憶喪失、不可視化。実はこれが植民地主義の典型的な症状である。北海道に関して「開拓」やせいぜい「(アイヌ民族の) 同化」という言葉は使われるが、ここが「植民地」であるという認識はきわめて希薄である。そのような現状であるから、植民地の認識を前提とした上でその状況の解消を目指す「脱植民地化」が、この北海道で問題にされることは、はるか先の話である。「植民地」として認識されざる植民地・北海道において、その脱植民地化とはどういうことか。現地でのささやかな経験から語ってみたい。

**帰還 (repatriation)**：19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋社会をレイシズムが覆った。それは植民地の他者を生物学的に劣った存在として序列化するイデオロギーであった。レイシズムの中から成立し、逆にそれを強化したのが人類学的な人骨研究である。それは先住民族（植民地にすでに住んでいた人々）の特に頭骨を測定し、その人種的な類型をまことしやかに「実証」する疑似科学であった。その研究の「標本」として世界各地の先住民族の墓地が暴かれ、大量の人骨が宗主国の大学・博物館へと持ち去られた。日本では小金井良精、清野謙次、児玉作左衛門らがアイヌ民族の遺骨を「収蔵」し続け、その数は千数百体に上るとみられている。こうした遺骨を出土地のコミュニティへと返還すること／遺骨が先祖として帰還することを、英語で repatriation という。「帰還」を求める先住民族側からの声が北米地域から高まり国際的な運動となっている。アイヌ民族の遺骨に関しては1980年代に散発的に北大から返還された後、2016年に札幌地裁で成立した和解を契機に地域への返還・帰還が始まった。しかし多くの課題が帰還を阻んでおり、残されたアイヌの遺骨の多くは白老町の「民族共生象徴空間」に併設された「慰霊施設」に置かれている。

そこには現在の北大キャンパスに当たる土地から、あるドイツ人によって盗掘された一体のアイヌ男性の遺骨も安置されている。その遺骨は約140年の長きにわたって異国の収蔵庫に留め置かれてきた。その出土地を私が探索する中で、普段自分が勤務する大学のキャンパス、そして生活の場である札幌の街と重なってアイヌ・コタンのある風景が浮かび上がるようになった。

**想起 (remembering)**：しかしそのアイヌ・コタンの歴史はいまのところ北大キャンパスと札幌の街のどこにも記されていない。無かったことにされている札幌のアイヌの歴史。この忘却の淵から、アイヌ・コタンを想起するためにまず作成したのが「北海道大学もうひとつのキャンパスマップ」である。これは2017年の日本平和学会春季研究大会の際に試作し、2019年に書籍化した(北大ACMプロジェクト編2017『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ——隠された風景を見る、消された声を聞く』寿郎社)。これを教科書として私は北大の全学教育科目を数度開講した。さらに2022年3月には、「アイヌ・コタンのある風景と遺骨の帰還」(<https://decolonization.jp/jp>)というコンテンツを含む「脱植民地化のためのポータル」をオンライン公開した。これは現在の札幌市地図に重ねて、明治初頭までサッポロに存在したアイヌ・コタンの情報を、古地図などの資料と共に収録し、ツアーのガイドとしても利用できるようにしたものである。北大にはアイヌ民族の歴史に関する標識を設置するように働きかけている。それがキャンパスの脱植民地化の第一歩となるであろう。

**スチュワードシップ (stewardship)**：脱植民地化は多面的である。宗主国から国民国家として独立するのが古典的な脱植民地化である。またカナダ、アメリカ合衆国、オーストラリアなどの入植者がマジョリティである国家において、先住民族が土地や資源に関する先住権 (indigenous rights) を回復することも脱植民地化であり、現在の北海道でアイヌ民族の川での鮭捕獲権をめぐる裁判が進行している。さらにここで述べたいのは「自然」との関係の脱植民地化である。「自然」を支配の対象とする関係性が近代を成立させてきた。これに対し、生きて自然とのケア的な関わりをスチュワードシップという。この言葉とかつてのサッポロとを重ね合わせながら深い脱植民地化の風景を開きたい。